

就職活動の環境変化に対応する大学の挑戦

学生が活用しやすい環境を整備し 就職活動期の社会理解を支援

年間約350コマのキャリア系講座やイベントの開設、予約不要の個別相談など、手厚いキャリア支援を実施している獨協大学。充実した支援を実現している体制や工夫、支援における考え方を、同大学のキャリアセンターに聞いた。

獨協大学キャリアセンター



キャンパス／埼玉県草加市 学生数／8,492人(2024年5月1日現在)
学部／外国語、国際教養、経済、法
キャリアセンター構成員／20名(専任10名、兼任10名)

キャリアセンターの環境と取り組み

学生が活用しやすい 環境や工夫を設ける

2024年に創立60周年を迎えた獨協大学は、外国語、国際教養、経済、法の4学部を設置する文系の総合大学だ。学生数は約8,500人の規模となっている。

同大学のキャリアセンターでは、「学生の"自律"、"自己理解"と"五感"を大切にしながら共に目標を目指し、自身と母校への誇りを持ち、卒業後に社会で活躍できるよう支援をする」という基本方針を掲げてい

る。キャリアセンターには専任、兼任を合わせて20名のスタッフが在籍している。学生数に対して、スタッフ数が多く、充実した体制が組まれている。

充実しているのはスタッフ数だけではない。同大学のキャリアセンターは、学食や図書館に隣接しており、学生の往来が多い場所にある。入口はガラス張りで、広々としたスペースだ。しかし、それでも「キャリアセンターには入りにくい」というイメージを抱く学生が少なくなかった。そこで、室内には音楽を流し、壁には講座やイベント

の告知、おすすめポイントをコンパクトにまとめた手書きのポップアップをつけた企業情報などを数多く掲示している。キャリアセンターの活動を通りがかりに外からぱっと見てもわかりやすくする工夫を設け、「ちょっと入ってみよう」としてもらえるような雰囲気づくりを心がけているという。音楽をかけているのは、活発な雰囲気を出すという目的に加えて、他の学生に相談内容を聞かれにくくすることで、学生に安心して相談してもらえるようにする狙いもある。

個別相談を完全予約制にしている大学が多いが、同大学は予約なしでいつでも対面の個別相談に応じている。キャリアセンターに入ると、正面に複数の相談スタッフの机が並んでおり、「気軽にすぐ相談できる」という体制をレイアウトでも表現している。

「1人につき1日1回という制限は設けていますが、学生には『いつ来てもいいんだよ』と伝えています。キャリアセンターを学生に気軽に利用してほしいと思っています」と、キャリアセンターの大田課長は話す。学生と直接面談する回数が多いことは、学生のメリットになるだけでなく、キャリアセンターが新たな講座を企画するヒントにもなっているという。

タイムリーなイベントや講座をスピーディーに実現する体制

基本方針にあるように、学生の“自己理

解”を促進するべく、数多くの講座やイベントを提供しているのも同大学のキャリアセンターの特徴だ。開設する講座やイベントは、年間約350コマに上る。講座は就職活動の基本を説明する就職ガイダンスから始まり、自己分析や業界研究、SPIなどの筆記試験対策のほか、面接やグループディスカッションなどの実践的な講座やインターンシップ、卒業生と交流するイベントも実施している。在学生のために、協力いただける卒業生が多いそうだ。

こうした多様な企画は、毎週の会議でアイデアを出し合っていると、キャリアセンターの小田島主査は説明する。「キャリアセンターの職員には、企業で働いた経験があるメンバーや、本学を卒業したばかりの若いメンバーもいます。それぞれが異なる視点で『こんなことができるんじゃない?』『自分が学生のとき、こんなイベントがあればよかった』など、意見を出し合っています。企画が決定したら、できるだけ時間をかけずに、タイムリーに実現するようにしています」。企画決定から、3週間程度で実施するイベントもあるそうだ。

「業界」ではなく「職種」に着目した講座を開講

同大学は2023年度から「職種から考える就職活動」という講座を始めた。業界や企業ではなく、「職種」にフォーカスした講座は、ほかではあまり見られない。小田



キャリアセンター内の様子

島主査は、この取り組みを始めた背景を、次のように説明する。

「就職活動が始めるにあたって、業界を見ても、数が多すぎて、どこから調べていいのかわからないという学生が少なくありませんでした。まずは職種に着目して『自分が何をやりたいのか』をイメージしてもらい、それを入り口にして業界に対する理解を深めたほうがよいと考えました」。

2023年度は「営業職」「SE職」「商品企画職」の3講座を実施した。実際にその職種の経験者や卒業生に講演してもらい、学生の質問にも答える形にしている。学生からは「営業はノルマが厳しいんじゃないの?」「SEは急なシステム変更に対応しないといけないの?」など、率直な質問も出たが、そういった学外では聞きにくい質問にも実体験も踏まえて説明をもらっている。特に良い面、悪い面を含めて、本音で話をしてくれる卒業生の話は、学生からも好評だという。事後アンケートでは、「営業職のイメージが変わった」「実際に働く人の説明を聞いて安心し

た」「もともと興味があった職種だが、より挑戦してみたいと思うようになった」などの感想が寄せられている。

「例えば、商品企画職を志望する学生の中には『営業職も事務職も自分には向いていなさそう。でも、商品企画職なら興味がある』という考えの人もいます。でも、消極的な理由で職種を選んでしまうと、面接で志望動機をうまく答えられないでしょう。この講座を受講して、『この職種を深く理解できたとし、より目指したくなった』という感想が出てきたのは、非常に嬉しいですね」(小田島主査)。

2023年度は、初回だったこともあり、10~20人程度の参加者を見込んでいたが、実際は予想を大幅に上回る100人程度が参加し、関心の高さが伺えた。LINE等で講座やイベント情報を発信しているが、プログラムの内容だけでなく、「業界研究に悩んでいる人」というキーワードを入れたことで、学生の注目を集めたのではないかと分析している。

キャリア支援の背景にある考え方

低学年次は学生生活を優先 学びでの気づきを就職活動につなげる

近年、就職活動が早期化、長期化していく傾向がある中で、低学年次からのキャリア支援を重視する大学が見られるようになってきた。同大学でも、低学年次からのキャリア支援も重視する一方、3年生から4年生の支援にも力を注ぎたいとしている。

「就職活動の早期化という社会の流れは、しっかり学生に伝えていきます。一方で、大学は就職活動をするための場では

なく、学生が自分を成長させる場です。就職への準備はもちろん必要ですが、低学年次はまず学生生活優先。普段の授業で得た気づきや、ゼミでの先生との出会いは、自分の将来への視野を広げてくれます。留学や課外活動などもそうでしょう。大学はいろいろな経験ができる場です。そのような場を大切にして視野を広げてもらいたいですね。キャリアセンターは、それを将来の進路につなげていく部分の支援をしていきたいと思います」(大田課長)。